

犬に よれば

リック・パナス／小原雅俊

訳



恒文社

WEDŁUG JUDASZA

ユダに
よれば

外典



訳者紹介

こはら 雅俊

1940年生まれ

1965年 東京教育大独文科卒

1967～75年 ポーランド留学

訳書：「クリスティーナの生と死」(たいまつ社)

「ぼくはだれだ」(晶文社 共訳)

「死者に投げられたパン」(恒文社)



©1978
KOBUNSHA

ユダによればハ外典▽

定価一五〇〇円

一九七八年二月二〇日 第一版第一刷発行
一九七九年九月三〇日 第一版第二刷発行

著者 ヘンリック・パナス

訳者 小原雅俊

発行者 池田恒雄

発行者 株式会社 恒文社

東京都千代田区神田錦町三三三
電話 〇三―二九一―七九〇一
振替 東京五―三五八二四

印刷・共同印刷 製本・飯塚製本
乱丁・落丁本はおとりかえいたします

1397-003072-2273

■ 目次 ■

ユダによれば

5

訳 注

303

訳者あとがき

317

作者略歴

324

ユダによれば

〈外典〉

さらに、ある人々は、カインは上なる力から生まれたものであると言っている。そしてエサウ、コラ、ソドムの市民たち、およびこの類の者たちは、互いに（又は彼らの）同族（仲間）であるとなみなしている。そして、それ故に、彼らは創造者から攻撃されたのであるが、彼らの内誰一人として害を受けたものはなかった。知恵が自分に由来する自分に固有なものを彼らから奪い返したからである。

彼らによれば、真切者ユダはこれらのことをよく知っており、彼のみが真理を知っていたので、真切りという秘密の業（*the mystery of the secret*）をなしとげたのである。彼によって地上のものも天上のものも共にすべて混乱に陥ったのである。彼らはこの種のつくり話をでっち上げて、それを『ユダの福音書』と呼んでいる。

エイレナイオス『異端反論』一・三一

他方、カイン派と呼ばれている人々は、カインは上なる力から自由にされた者であり、エサウ、コラ、ソドムの市民たち、さらに他の同じような人々（もそうであり、彼ら）はすべて、互いに（又は自分たちの）同族であると認めている。そして彼ら（カイン、エサウたち）は創造者によって憎まれたけれども、彼らから何の害も受けなかった、と言う。というのは、知恵が彼らの中に持っていたものを、彼らから奪い取ったからである。さらに彼らによれば、すべての弟子（使徒）たちの中でも真切者ユダのみがこの認識を持っており、それ故にこそ真切者という秘密の業をなしとげたのである。彼らは、自分たちでつくり出した、彼（ユダ）の福音書を持っている。彼は真切りの報酬として実に絃音楽を手に入れたのである。

彼らは禁じられていることを行いながら、まるで放縱を厭うてども言うかのように、天使の名を呼ぶのである。しかもそれを、放縱の業の一つ一つについて行うのである。そして、放縱な業を行うものたちによってあがめられる天使たちの数は、放縱な業の数と同じである、と言っている。

ある者たちは、カイン派と呼ばれている。この異端はカインにちなんでこのように呼ばれている。というのは、彼らはカインを称賛し、彼を自分たちの父と呼んでいるからである。彼らはいわば、大波のうねりの中から出て来たかのごとくに、波にまき込まれており、また、とげのあるものの中から身をのり出してのぞいているかのごとくであり、たとえ彼らの名前がさまたまであらうとも、同じ一つのいばらの堆積の中にいるかのごとくである。いばらには多くの種類があるけれども、どのいばらの中にも、いやなあのいばらのとげがあるのである。

彼らは、カインは強い力、上なる力から生まれたものであり、さらにエサウ、コラ一族、ソドムの市民たちも（同じである）と言っている。しかし彼らによれば、アベルは弱い力から生まれたものである。これらの者たち（カインたち）はすべて彼らの許で称賛されており、彼らの同族である。彼らは自分たちこそカイン、ソドムの市民たち、エサウ、コラ一族の同族であるというので傲慢（横柄）な態度を取っている。そしてこれらの者たちは、上から与えられた完全なる知識を持っている、と言っている。それ故に、この世の創造者は彼ら（カインたち）を滅ぼそうとしたけれども、彼らを害することもできなかった、と彼らは言う。彼らは、彼（創造者）から隠され、強い力の出てくる場所である上なるアイオーンへと移されたためである。知恵が、自分に属する者である彼らを自分自身の許へ近づけたのである。そしてこの故に、あのユダはこれらのことを正確に知っていた、と言う。彼らは彼をも自分たちの同族にしようとし、彼の内には特に優れた知識があったとみなしている。そして彼の名にちなんだ一つの著作、彼らが『ユダの福音書』と呼ぶものを、持っているのである。

友よ、あなたが言うように、人類思想史の研究家や愛好家が抱く、よくある好奇心が、あなたをしてそうさせたのだとするには、あなたの質問は多すぎるように思えてならない。確かに、完全な知識を渴望するというのはわれわれの悟性（思うにそれは、純粹に実践的な課題のために予定されているものである）のパラドックスである。だがそれは、歴史の領域では実現不可能な夢想のように思えてならない。とは言え、誰にもまして深い教養をもつ者であっても、なおかつそれを求めずにはおれぬのが常である。

しかし、体系を作り出し、それによって、衆生一切の、永久不変の真理を確立しようと努める哲学者もまた、自分が用いているどの言葉も観念であること、どの観念も抽象であることを忘れているものである。抽象はその定義からして現実ではない。ここに、私たちが何を基礎にして思考するかの問題がある。すなわち、現実に関する私たちの知識は、現実ならぬ観念の集合なのである。

それゆえ、現実が真理であるという確信と、現実に対する私たちの認識が真理であるという確信のうちどちらかひとつを選択するとすれば、私は第一の確信の方に傾いていると言つてよい。歴史が事実の客観的叙述以外の何物でもあり得ないことを認める限り——それがいかなる場合にも歴史の真实性を拒否しているのだが——この選択は、もちろん、歴史の妨げにはならない。

現実の意味を歴史に帰するとき、事態は悪化する。そのときわれわれは、前述の矛盾に陥るからだ。

あなたが、過去について書くことを私に義務づけている以上、この留保は絶対に必要だと考えている。

この過去についての物語が、不吉な預言者たちの意とは異なり、われわれの時代で終わりを迎えるつもりなどさらさらないこの世の今後の運命にとって、重大な結果をもたらすことになるかも知れないからである。私は人生の晩年にあり、私に沈黙を守らせてきたものも消え失せた今は、あなたの依頼に応じるというだけでなく、私自身が当事者のひとりであった出来事や信頼するに足る証人の口を介して知った証言を、後世に残しておきたいと思うのだ。

しかし、同じく疑わしいものではあれ、この証言は歴史ではない。なぜなら、裁判官ならば誰もが知っているように、すべての人間は虚言者であるからだ。ひとつの事件に、全く同じ二つの証言というものはあり得ない。昨日の市場で起こったいつもの事件の場合でさえそうである。ましてや、数十年経たのちに、思いがけず、現在と将来の世代にとってきわめて重要な意味を持つことになった遠い昔の事実に対して、この証言がどれほどの価値を持つものであろうか。

だが、ことは真にそのように重大なものであるかどうか、私には確信がない。しかし、少なくとも私にとっては重大なのだ。それに、ひとたび叙述してみようという気持になったからには、すでにアフリカやスペイン、ガリシア地方のユダヤ人共同体のもとにたどり着いた宗派の伝道者らによって公にされている情報に対するあなたの懷疑からしても、また人口や文字を介して流布されている私という人間、厳密に言えば第二の私なる人物に関する信じがたい流言（それは事柄に対する私の関係を何ら変えるものではないが）からしても——時が冷却させた知性のうちになおいらだたしさの残り火がくすぶっているとは言え——ますます私はその決意を固めるのである。

今日まで、下層民のうちに広められた様々な誹謗中傷を私が氣にとめなかったとすれば、それはそれなりの理由があったからだ。だが今はその理由も失われた。私の年齢もまた、自ら引き受けた義務から私を解き放ってくれる。

あなたの言葉から推察するに、時代の病は、私が想像していたよりもはるかに大きな広がりをもったものであり、われわれ現代人が瑣末なものとみなしていることが、あるいは、いつの日か——私自身はそうした考えにはほど遠いのだが——帝国の将来に影を投げかける大樹に育つことになるのかも知れない。

二人だけの話として言えば、ホラティウスが諸王の一切の狂気をあがなうのはその臣下であると述べているように、僧侶の横暴と世俗人の横暴のどちらがよりいっそうの悪であるものか、私にはまるでわからないが、その影が、帝国の命運に破滅的な影響を及ぼそうが及ぼすまいが、私にはおおよそどうでもよいことである。

先に述べた可能性のことを考えてみるだけでも、疑念と不安が沸いてくる。もし実際にそうなっていたならば、あなたが尋ねておられる方は、まことに救世主であったと認めざるを得なくなるからだ。賢い者はその見解を変えるにためらわない、という周知の格言があるにしても、実際には、世間で定まった見解を変えるのを誰も好まぬものであり、また、すでに齡百歳を数えようとしている私には、無用のためらいと言つてよいであろう。

御承知のように、私は祖先の信仰からは完全に離れてしまったが、それでもなお、老いが知性を混濁させるにつれて、自分が、ギリシアの思想家の誘惑に屈したことは正しかったであろうかという疑念に時折囚われる。あなたの依頼のおかげで、私はもう一度、すべてを順を追って検討し直し、それと同時に、気弱な一時を克服することが出来た。いつまで続くかはわからない。しかし、コーヘレスなる名の、あるユ

ダヤの知者の「空の空、空の空なるかな、すべて空なり」という文句を唱えつつおだやかな眠りにつけるように、私の見聞した一切の事柄を、丹念に書き綴る時間は十分あるであらう。

あなたが出された質問があまりに多いために、物語全体を質問の順序に従って叙述することにしたが、当初、私は全く別の考えを持っていたのである。

あなたが予定されている作業に、これがどれほど役立ち得るものか私にはわからない。あるいは、すでに長らくユダヤ人問題に取り組んでいる解放者フラヴィウス・ヨセフスの方が、はるかに役立つということになるかも知れない。しかし、これまでに彼が発表したものを見る限り、彼自身が体験したこと以前の古い出来事に関しては、深遠な知識を持つていたとは思えない。彼は、ほとんど雑談風とも言える、実に微に入り細をうがった叙述を好む著述家なことは確かだが、同時に、実務的感覚の欠如した、いい加減な、事態をややこしくさせる人間でもある。この点からすれば、ギリシアにトゥキュデデスあれば、ローマにこの人ありと言えるであらう。コルネリウス・タキトゥスにはとても及びもつかない。

ヨセフスからは、あなたが関心を抱いている事柄はあまり見出せないであらう。パリサイ派の伝承——彼が所属していた宗派の伝承である——からとった、わずかに数行の引用が見られるだけだからである。もし、あなたが書くこととされている歴史が、この物語によって何かしら得るところがあるとすれば、それは私にとって喜びであり、光栄である。なぜなら、純粹な趣味として、私心のない仕事に取りかかるならば、あなたが不朽の傑作をものにされるであらうことを私は疑わぬからである。

第一の書

私はいかにしてガリラヤ人イエスを知ったか

1、家庭教育について。2、カリオテ滞在。3、ティベリアにて。4、マリヤの人となり。5、ガリラヤ人の道徳観。6、タリカエア。7、マリヤはどのような女になりえたか。8、ヘルマスとその宗派と師の十二人の女との恋愛事件に関する余談。9、マリヤとの最初の出会いとうち砕かれた希望。10、ティベリアからのマリヤの追放。11、町の外で起こっていたこと。12、様々な自称民衆指導者がパレスチナに騒乱を広める。13、メシアについて。14、ラビ・イエスについての最初の知らせ。15、哲人悉達多・喬苔摩とその教えについて。16、涅槃とは何か。そこへ至る道。17、イエスの弟子たちのあとを追う。18、イエスとの出会い。イエスの風貌。19、ロギーすなわち臂え話に関するいくつかの注釈。20、修辭学的ひけらかしをいかに長い間我慢して聞けるか。C・プリニウスのもとでの討論会。キチラ島出身のフィロクセノスの物語。21、法悦の情景描写。22、カディシユの祈り。イエスの群とその慣習の最初の観察。23、マリヤとの対話。結婚の申し込みとそこから生じた結果。24、拒絶。その理由。異常誇張癖と抽象概念について。25、兄弟同士の愛の約束。26、イエスと彼の群。27、ヨルダン川の向こうからきた伝道者ヨハネ。その

教えと宗規。28、神の御霊のイエス訪問。彼に何を啓示したか。29、後世のこの物語の歪

曲。30、下層民の間に流布しているイエスに関する様々な作り話へのイエス自身の態度。

31、イエスの性格分析続篇。信者たちには抗えなかった女と性的欲望に対するイエスの態

度。32、群に加わるに際しての初期の困難。金の鍵。

1、当時私は、ようやくあごひげが伸び出したばかりの若者であった。銀行家であり、アレクサンドリアの有力な商会の共同出資者であった父シメオン・バル・サドクは、私が十分な教育を身につけられるように心を砕いてくれた。私の家ではユダヤ的伝統が尊重されていたのは確かであるが、異教徒との教知れぬ接触を持っていた以上、われわれの古めかしい慣習の多くを守るところではなく、逆に、アジアの成金とみなされなくてはならぬ。ほかの、とりわけギリシアの風習を受け入れる必要があった。ローマの風習については、もちろん知っていることは必要であったが、学問の対象ではなかった。ローマ文化が洗練されたものとみなされ、ラテン語が開化された人々の言葉となっているあなたがたのガデス^{*}の地や西部地方全域でもそれは同じであった。アレクサンドリアおよび東方の全域では、両文化とも、わずかに、征服者に押しつけられた重荷として認められていたにすぎない。

われわれのところには、かつてはギリシア精神が行きわたっていた。原則的には今日も絶えることなく続いている。もはや私の若い頃のような輝きは放っていないとはいえ、それが太陽であることに変わりはない。

われわれの民族の学問と伝統を私に教えてくれた最も優秀なユダヤ人教師たちとは別に、私はギリシア

人の教師をも持ち、またムーサイ学園^{*}の講義にも通っていた。

私は、高名なフィロンの教えにもしばらく耳を傾けていた。そのユダヤ形而上学とプラトンの理想とを調和させようとする試みを、私は無批判的に崇拜していたのである。この哲学者の思想は、今日では、かつてのような感動を与えてくれないが、ユダヤの様々な宗派について叙述する時が廻ってきて、この厄介至極な仕事に耐える力がまだ残っているようなら、いずれ、そのことに触れざるを得ないであろう。

これらの矛盾しあった様々な教えを吸収しつつ、私は困難な立場に身を置くことになった。それが私の胸に多くの疑念を起こさせた。その疑念は、時とともに強くなり、ついには、厳密な自然科学の範囲を越える事柄に対する全面的な不信を抱くまでになっていった。しかし、そうなる以前に、私は、とある出来事によって、若いときにはよくあることとはいえ、全くの逆の極端へと走ったのである。しかも私は、このうえなく真剣であった。

2、商会の事業が、誰か家族の者がパレスチナの倉庫や事務所の監督にあたるように要請していた。そのため私は、ヘブロンからさほど遠くない、わが商会の大きな穀物倉庫があったカリオテでしばらく過ごすことになった。この貧しいちっぽけな町——およそ、数軒の売春宿と宿屋のほかにはひとつとしてまともな建物のない集落を町と呼べるなら——が存続出来たのは、私どもの倉庫、と言うよりはありとあらゆる種類の農産物の毎日の輸送のおかげであり、また、騾馬追いや駱駝追い、運搬人など、機会さえあれば、ところかまわず、かなりの稼ぎを飲み尽くしているあのならず者たちのおかげであった。倉庫と帳簿の整理を済ませると、私はならず者たちに代わって、誠実な部下を見つけ出さねばならなかった。だが、これは、決して容易に出来ることではないものである。

3、一年間のカリオテ滞在のあと、私はティベリアに移り、その後、アジアの町としては至極文明化した町、パニアス・カイザリア、すなわちピリポ・カイザリアに移った。この最初の町で、家族を遠く離れて暮らしており、かなりの財源を自由に出来る若僧であればいつ起こっても不思議はない、一風変わった冒険に出会ったのである。私の家系の者は皆そうであるが、私もまた、自分自身の金銭、そして自分に託された金銭の支出には、相応の節度を保つことが出来た。この、生得のもので、あとで身につけるといふことは不可能な性格のゆえに、商会の経営陣は、一族には属さぬ、経験豊富な古くからの従業員によりも、むしろ私のような一族の若い者に、躊躇せず責任ある地位を任せたのであった。従業員たちは相談役の地位にあったが、と同時に秘密裡に密告者の役目も帯びていた。そのことを私が知ったときには、すでに遅すぎたのであった。しかし、そのことについてはのちに述べるとする。

4、さて、ティベリアには、出身は疑わしいが、稀にみる美貌を持ったユダヤ娘がいた。ガリラヤは、概して美男美女の土地として名高いが、あるいは、かつてない人種や民族の混濁が影響しているのかも知れない。そのためもあって、ユダヤの人々は、種の純血という点から、ガリラヤのユダヤ人を人種的に劣等な人々、ほとんど非ユダヤ人に等しいものとみなしていた。

マリヤは青い目をした金髪の子であったが、そのこと自体すでに、彼女の中にはケルトもしくはゲルマンの戦士の血が流れていることをあかしていると言えよう。あるいは、はるか遠い昔、ヒッタイトの征服者のひとり、どこかで、彼女の家系のうちにその種を残していったとも考えられる。ガリラヤでは血の遺伝を問題にする者などなかったが、マリヤは、信仰からしても育ちからしてもユダヤ女であった。貧困と美貌のゆえに、彼女はとあるローマ軍連隊長の情婦になっていた。この連隊長が、彼女に惚れ込んでい

て、士官としてのささやかな給料にではなく、商人や国境の密輸業者から遠慮会釈なく取り立てた賄賂にふさわしい贅沢を彼女にさせていたことは認めねばならない。

5、ガリラヤの民の風俗は、きわめてだらしないものであった。とりわけ、ここゲネサレト湖西岸地帯の民はかなり粗野でさえあった。そうは言っても、ローマ将校との公然たる売春行為はやはり公認の道德の範囲を越えていたから、パリサイ派も聖書学者も、さらには民衆も、それを激しく非難していた。もし彼女が、同じ信仰を持つ者とそうしたのであれば話は別で、そのときには、罪業に変わりはないにせよ、それほど激しい怒りは買わなかったであろう。だが侵略者への肉体提供は、罪業であるだけでなく、反逆でもあったのである。

6、マリヤは、この地方の言葉でミグダル・ヌマヤ、つまり魚の塔と呼ばれているタリカエア^{*}で生まれた。当時は、ゲネサレト湖岸の僻村で、ティベリアからはおよそ二十八スタディオンの距離^{*}にあった。私どもの商会は、そこにも、倉庫と、主として軍隊に調達する魚の塩漬工場を持っていた。

ネロ皇帝^{*}の時代のユダヤ人叛乱の勃発直前に、集落は港町となり、波止場には二百三十隻の漁船が繫留されていた。フラヴィウス・ヨセフスは、この町の人口は四万人を数えたと記している。しかし、彼を信じてはならない。実際の人口はその十分の一であったからだ。

この町に、私は庭園と砂浜のついたギリシア風の別荘を建てていた。この別荘を建て、商会の取引客である高い地位の人々の歓待にあてるように命じられていたのであったが、私はこの所領を自分のために無制限に使用することが出来た。私の名で登記せざるを得なかっただけに尚更であった。つまり、私は、好

き勝手にこの別荘を使うことが出来たわけである。だが、そこに住むべき人がいなくては、一体それが何の役に立つ。

そのために、所領がもっていた魅力のすべてが消え失せてしまった。ついにこの別荘には住まずじまいであった。かと言って私は、とあるシリアの商人が、そこに高級将校のための品のよい売春宿を開きたいと言って、多額の出資を申し出てきたにもかかわらず、売却もしなかった。ご覧のように、自己顕示癖を露わにしているのは決してフラヴィウス・ヨセフスだけではないのである。

7、ここで話題にしている娘は、実際美しく、その姿かたちは、どこをとっても、ギリシアの名工たちののみにふさわしいものであり、しかも知性は——そこまでするとめったにあることではない——彼女の日々の生活とは正反対に、澄み切った清らかなものであった。それはいわば、不品行には汚されず、新鮮で、事物に極度に敏感なままのものであったと言えよう。もしペリクレスの妻が遊女であったというのが事実なら、彼女は第二のアスパシア^{*}になれたであらうし、実際、マリヤが望むならば、プラクシテレス^{*}がクニドスのアフロディテ^{*}の姿をとってフリュネ^{*}を不滅のものにしたように、私もまた、マリヤの形姿をアナデオメネのアフロディテ^{*}として、子孫に伝えてくれるような彫刻家を探し出したであらう。しかし、彼女にそのつもりがない以上、どうなるものでもなかった。

8、私がマリヤと知りあったのは、彼女が、不意に、水の精のように清々しい姿で浜から戻ってきたときのことであった。残念ながら、私は、女主人の水浴の場を目にして恋のとりこになってしまった、かのヘルマスのような幸運には恵まれなかった。どうやら、運命は愚者にのみふんだんな贈物をするものよ